

続

## 感情教育 待望論

### その 13

# 心に震えを

## —— 魂の教育 ——

元玉川大学教授 上原輝男

### 1.

只今は、校長先生から丁寧なご紹介をしていただきましたが、少し付け加えさせていたいただきたいと思います。

本日お招きいただきました奇縁は、本会PTAスクール主催者の小林孝正さんが、実は私の最初の教え子なんであります。私が広島の高等師範学校を出たほやほやの先生だった時の教え子第一号なんであります。彼と顔を合わすのは、三十四年振りですが、小林さんにしてこの師匠ありというふうにみていただければ、ありがたいと思っておるわけであります。

小林さんが私をこの場に引っ張り出してくれましたのは、私が「徹子の部屋」に出ましたので、自分の古い師匠であるけれども、何か皆さんの役に立つような話をするんじゃないかというふうにお思いになったんだろうと思います。果たして、今日は三十四年振りに、

私の実力を彼にテストされるわけですので、私としましても、今日は大いに成績を上げて、「やっぱり、我が師匠は素晴らしかった」と彼に言わせたいというふうに張り切っているわけであります。

私が「徹子の部屋」に出したのは、昭和のはじめ東京にいくつも新教育による学校が出来、黒柳さんがその新教育を受けており、私も新教育の玉川学園、玉川大学で教鞭をとったということが関わっております。新教育による学校は、新しい人間を作るというようなことに情熱を燃やして造られた学校であります。

そんなことで、私を「徹子の部屋」によってくれたんだろうと思うわけであります。先程のご紹介に付け加えさせていただきたいと思うことは、私は原爆患者であります。爆心地から一七キロの地点で歩いているところを被爆した正真正銘の原爆患者であります。見た感じでは全く常人と変わらないと思います

けれども、やっぱり後遺症的なものはありません。どうやら、頭のほうが少しいかれています。んだろうと思っているわけですが、私の教え子達に口の悪いのがおりまして、「いや、そうじゃない。上原先生は、原爆に遭ったから頭が良くなったんじゃないか。」という者もおるわけであります。

また、もう一つ私自身を知っていたく為に付け加えることがございます。それは、もう十年経っておりますからたぶん大丈夫だろうと思いますが、私は、これまた正真正銘の「肺ガン患者」であります。全部じゃありませんが、左肺を切除しまして、今なお生き続けているわけであります。この「原爆患者」「肺ガン患者」であるということは、私を知っていたく上で一番いい材料なんではないかと思えます。これだけ申し上げれば、私という人間がどういう人間か、少し業が深いんだと言え、そうかも知れませんが、或いは、死に損ないだと言え、死に損ないな

のかも知れません。

## 2.

私の専門について、お話致します。私は、「専門は？」と問われた時にいつも困っております。今日の題目「心に震えを―魂の教育」にしても、「心と関係のある話をするだろう。」っていうように仰っていたかもしれませんが、『歌舞伎十八番』なんていうようなものの著書があったり、『芸談の研究』なんていうのがあったりする。「一体、何やっているのか？」っていうふうなことを、よく言われたりもしております。ところが、先だってNHKのラジオの放送を四日間にかけてやった時のことです。アナウンサーが、「先生の専門は何と言いましようか？」と言って困っている。面倒臭いから、「国語教育ぐらいでいいじゃないでしょうか。」と言ったら、「それは困る。」と言われたわけです。で、「はつきりあることはあるんですが、ただ世の中にあまり知られていないんです。」っていうふうに申し上げた。それは「心意伝承」という学問なんです。「心意伝承」という言葉は、耳で聞いただけでは分かりませんので、何と言うかと思っていいたら、そのアナウンサーが、「心の民俗学」がご専攻であります。」と言ったわけです。こういう

うことを私も初めて聴きました。心の民俗学。これは、大変素晴らしい名称である。それから私は、「心の民俗学」をやっている。」と言おうかと思っただけですけども、どうも恥ずかしくて言えないんですが、「心は民俗である」ことははつきりしています。「心は民間風俗、風俗習慣なんだ。」っていうことは、誰でも領いてくれるんですけども、どういうのか一般常識になっておりません。子どもの心を問題にしない教育者はいないし、必ず心の問題を説いてきているはずでありますけれども、現代学校教育自体が、どうも傾向としましては、「心はお前自身の持ち物である。」というふうな形で、行われているのが常識であります。「お前は自分の心を持っている。その心に劣るところがないようにしなくちゃいけない。」こういうふうに言うのが常識になっております。しかし、これは誤りであります。誰でもが「吾が心」っていうものをどこか感じてはいると思います。しかし、「どれが吾が心であるか、指摘せよ。」と言われた時には、誰でもが苦しむはずなんです。もつとはつきり分かることは、「吾が心だ」と思って、それをつかまえにかかると、それは親が教えてくれた心であつたり、じいちゃんばあちゃんが残してくれた心であつたりするものであります。

この「心の問題」を、私自身が専門として

いる「心意伝承」を軸にして思い切った話をしようとして初めて覚悟して参りました。これに似たような話を何故、大勢の人がしてくれないんだらうっていうふうに私は不思議に思っております。おそらく、私がこういうことを申し上げるのは、私が専門であるから申し上げているというようなことだけではなくて、先程申しましたように、きっとこれは、私が「原爆患者」であり、そしてまた「肺ガン患者」であつたというようなことが影響して、私はそこに今日思い到っているんであろうというふうに思います。この中には、ご年配の方もいらつしやいますから、死線を越えて来られた経験をお持ちの方もいらつしやると思います。私は兵隊検査は既に済ませておりましたが、戦場に赴いた訳ではありませんでした。私と同窓・同級の者達は既に戦場に赴いていました。乙種の者が先に出かけました。私はこれでも「甲種合格」で、「適航空兵」でありました。でも、私には召集が参りませんでした。そのおかげで、原爆に遭いませんでした。そして私は、九死に一生を得たっていうことになるんだろうと思いますが、被爆後、三ヶ月程は天井とにらめっこの生活を続けました。今、私は原爆の話をここで展開していこうとは思っておりません。私が、死線を越えたので、やっぱり死と生との問題を考えなければならぬ、そういう運命を持って

いたということだけは、まず分かっておつて  
いただきたいと思うわけであります。

そして、その九死に一生を得た男が、今日は「心の問題」を語ろうとしているわけであり  
ます。私は、「吾が心」を語ろうとは思つて  
おりません。「私の心は伝承されてきてい  
る」ということだけは、私には分かつてい  
るわけであります。そのことを申し上げてい  
こうと思つてゐる次第であります。

余談になりますが、私は今、平塚の「原爆  
の会」の会長であります。しかし私は、断固  
会長就任を断り続けました。私は嫌いなんだ。  
特に、「原爆の会」を作つてその会長に納ま  
つたり、あるいは集団活動をするというよう  
なことは、私は考えられないんだ。人間の「い  
のち」の問題を考える時に、集団で考える  
という考え方は、私は限界があるつていう  
ふうに思つてゐるからであります。「草の根運  
動」に対して反対してゐるわけではありま  
せん。その辺は誤解のないようにしていただ  
きたいんですが、それよりもつと静かに生死  
の問題を考えてみたいつていうふうに思  
うわけであります。私に余命が与えられて  
いるとするならば、それに捧げるべきこと  
などではないかつていうふうに考える訳  
であります。

### 3.

「徹子の部屋」で私は、「黒柳さんは話が上  
手であつて、そして早口でよくしゃべられ  
る。それはきつと親御さんがおつけになつ  
たんでしょう。」ということをも、まず冒頭  
に申し上げました。そして、「あなたは、大  
変口のさばきのいい人です。」つていう  
ことを申し上げました。「口がさばける  
つていうのは、どういうことでしょうか？」  
つて、黒柳さんが私に質問しました。あ  
あいう口をもつて職業にしている人でも  
、「口がさばける」つてご存じないのか  
なつて思つて、ちよつと異様に感じまし  
たが、「相撲取りが、『前さばきがいい』  
つて言うでしょ。あれと同じように、口  
にもさばきが必要です。それを、あなた  
は持つておられる。」というふうに説明  
したら、何か分かつたような顔になりまし  
た。そして、「それを付けたのは、おかあ  
さまだと思ひます。」という話をしまし  
た。「どういふことでしようか？」つて  
いうことでありましたので、

「あなたは、小さい時から挨拶のできる  
人であつたように思ひます。『窓ぎわの  
トットちゃん』を読んで、私はそのよ  
うに思ひました。」と申し上げたわけ  
です。

まず、人と会う時の第一声と申しま  
しょうか、「口を切る」。それが挨拶であ  
ります。こ

のしつけが、あなたのおかあさんは充分  
にやつていらつしやるんだと思ふん  
です。だから、あなたは誰とでも話  
ができた。『窓ぎわのトットちゃん』  
をお読みの方は、お分かりだと思ひ  
ますが、「鉄条網をくぐつたり、あつち  
へ行つたり、こつちに、ジグザグにく  
ぐつて」というふうに、そして、いち  
いち挨拶をやつてたつていうんですね。

これは、後に聞いた話です。黒柳さん  
のおかあさまを知つてゐる方が、お母  
さまは大変にご挨拶のきれいな方であ  
るとおっしゃつてました。私は、その  
時にちよつとこんな話も致しました。  
『挨拶』という言葉は、日本語ではな  
く漢語であります。つまり、中国渡  
来の言葉であります。こんな中国渡  
来の言葉が、日常生活の中に入つて  
ゐるということ自体、私は驚いてゐる  
んですよ。」ということと言つたわけ  
です。これが、純粹の和語、日本語だ  
つたらそう驚かないんですけれども、  
「挨拶」つていうこんなに難しい字を、  
それをそのまま「あいさつ」と口にし  
てゐる。耳で聞くだけでは分らない、  
難しい言葉です。「挨拶」とはどんな  
意味なんだろう。「拶」とはどんな  
意味なんだろう。それで、どうして  
「挨拶」つて言うんだらう、という  
ことであります。「挨拶」と「拶」は  
似たような意味を持つてゐますけれ  
ども、せまる。相手にせまつていく。  
体をすりよせていく。これ

が「挨拶」であります。「拶」というのは「ひらく」っていう意味がありますが、「挨拶」もないわけではありません。ですから、「挨拶」する時には、尻込みしてはならないのです。一歩前に出て、相手に近づかなきゃならないのです。これが「挨拶」であります。だから、日本人はそのことを知っているというか伝えられておりますので、「あの子は、人前でまだ挨拶もできない。」というような言い方をしているわけであります。「なあに、あの男はありや大したことないや。まだ挨拶もろくすっぽできないではないか。」っていうようなことが、人間を測る一つの基準にもなっています。

私はこの、日本人がどんな挨拶を交わしているかということから、今日の話を始めたいと思います。大変面白いんです。そういうことが私の専門なんですけれども、「日本人がどんな挨拶をするか？」これは恐らく、地球上でも素晴らしい最高の挨拶を日本人がしていて、挨拶にかけては優秀民族だと言わざるを得ないと私は思います。

「こんにちは」という挨拶は、省略形であります。「今日は、……です。」と言わなければ、あるいは、「今日は……ですか。」と言わなければ正しい文章になつてはおりません。それが省略されたのが「こんにちは」ですが、問題はその後です。「今日は、お元気

ですか？」って言っていることです。素晴らしいっていうのは、何で「元氣」だっていうふうに尋ねるのかっていうことであります。「元氣」という「本来の氣」は、大丈夫かっというのを尋ねているわけでありまして。「あなた、氣はしっかりしているか？」っていうのと同じなんです。これは実はすごいことなんです。どこで誰がそう指導してくれたのか、我々の先祖の素晴らしさっていうものを考えざるを得ないんですけれども、これは実は中国の哲学なんです。中国人は「今日は、元氣ですか？」っていうふうに今でも尋ねているかと言うと、氣の毒ですが、中国人はこの挨拶を放棄してしまっているわけでありまして。日本人だけは、この知恵の素晴らしさを分かっていたんでしょうか、ずっと持ち続けているわけでありまして。

#### 4.

「挨拶」は中国哲学だと言いましたが、中国に「天人合一説」っていうのがあるわけなんです。私はこれが根底だと思います。つまり、天が人に氣を与えているわけです。「天から与えられた氣が、あなたは、今日はどういう具合ですか？」っていうのが、「お元気ですか？」なんです。「あなたのご機嫌は如何ですか？」って、ご機嫌伺いをすること

は、「天からあなたに与えられた氣は、どのようなものであるか？」っていうことを尋ねているわけでありまして。このようなことから、吾が心は吾が心にして、吾が心にあらざう」ということが、私の今日の話の内容であり、吾が心は、天から与えられている心なんだ。」ということから始めようと思うんです。

ところがどうしたことでしょうか。特に現代の教育においては、この天人合一説あるいは天人合一の思想は、どっかに霧消してしまつたわけでありまして。雲散霧消して、誰も語る人がいなくなつてきつたわけでありまして。不思議なこと現象であります。日本人が日本人の子弟を教育するよすがとしていた三百年続いてきたものを、なぜ放棄したんでしょうか。

まず、その放棄したものに儒学があります。天人合一の思想とか中国の哲学、孔子、孟子の教えであります。なんと日本人は、三百年間これで人間を教育していたわけでありまして。さらにもう一つ、仏教があります。この儒教・仏教を、なぜ戦後かなぐり捨ててしまったんでありまじょうか。このことは、誠に私共も含めまして、学校教育担当者は考え直す必要があるだろうというふうに思います。どこのカリキュラムを開けてみても、小中高大ともに開いてみても、儒学・仏教、こ

れに関連のある教科課程が捨てられてしまっているわけがあります。そこで、学習指導要領の中で、あわてて『道徳』というものを特設するようになりました。しかし、これは失敗であります。何故ならば、道徳という問題の取り違えだからであります。今日、道徳という言葉には、道徳は社会規範であるというような感じがあります。特に若い者たちだけに、道徳上それが許されないなんていうようなことを言ってみても、子ども達はそっぽを向くばかりです。何故か。それは、道徳は「自分達の行動を縛るものだ」というふうな意識しか生まれていないからであります。

また、私はこんなふうにも思います。今日の子ども達や青少年がとやかく言われているのは、我々の年代の者達、あるいは老人達・大人達に責任があると考えなければならぬことであろうと思います。

何故に、このような状態が生まれてきたのか。私はやっぱり、敗戦という憂き目に遭って、そしてあの日本国民が飢餓戦場を彷徨った。あるいはまた、今までの生き方等を変えなければ生きられないというような事態を迎えたあの時に、大人達が口を噤んだということ。自分達が間違っていた、日本国家をここに追い込んだのは自分達の責任であった。もはや自分達には発言する資格はないというふうに、次々に大人達が口を噤んでいった。あ

あいう時代があったからだというふうに思います。私は、大人達、年寄り達、子ども達、どの年代の者達も口を噤んでいいということではなくて、絶対に老いも若きも幼きも、それぞれにおいて発言し、意見を交わしていかなければならないと思うわけがあります。大人達が口を噤んだばかりに、受け継がなければならぬものが受け継げなかったということが、今、現れてきているのではないかと思うわけがあります。私も含めてであります。私も終戦の後に、私の父親達に向かって、これからはあなた達の世代の人達は何にも発言する資格も持たないであろうというようなことを、開き直って言ったことがあるような気が致します。「今度は、我々の天下だ。」と言った覚えもあるような気がします。しかし、今思い返してみると、思い上がりも甚だしいと思うわけです。若者達だけのために、この世はあつたりするものではありません。年寄り達のためにも、日は太陽は当たらないければなりません。小さい幼子達のためにも、太陽は照り輝かなければならないものがあります。我々はいつの間にか思いあがった若い者を育てていたのかと思うと、残念でありません。

## 5.

原爆に遭った時、私は足を奪われて歩けませんでした。「原爆図」に出てくるような形で私も右往左往したわけですが、特に両足とも焼かれたものですから、歩くことが不可能でありました。その時に私は幼い女の子の手を引いておりました。それは全く見ず知らずの子どもであります。幼稚園ぐらいの子どもで、その子と三晩四日、広島駅の裏、現在新幹線がちょうど走っているところあたりの練兵場に寝ていたわけであります。その子が親にはぐれたのかどうしたのか分かりませんが、手足は大丈夫でした。しかし、目をやられていました。あの熱線を受けているために、目は開きません。私はその子の手を引いて「お兄ちゃんと一緒におう。お兄ちゃんは足を取られて動けない。君は顔をやられて目が開かない。でも、お兄ちゃんの目は開いている。お兄ちゃんの足は動かなくなっても、君の足は動く。二人おれば、何とかなる。」と言って、その子と一緒にいたわけがあります。どういうわけか、この辺りが原爆で呆けた証拠だと思ふんですけれども、その子とそうやって一緒にいるんですから、その子の名前を聞いていないわけがありません。ところが、何としても、その子の名前が出てこないんです。勿論、その子が着ている

洋服が、こう、所々へばりついているついでに、いまいしょうか、もう、服も何もかもぼろぼろだったんですが、その柄でもって捜しに来た人が、「なんとかちゃん。でないか。」って言って、偶然探し当てたんですね。そしてその子連れれてきました。その子と私とはそこで別れてしまったきりで、今日でもなお会えないわけでありすけれども、その子の名前は残念ながらどうしても出てきません。ただ、私がよく覚えていたことというのは、その子は、眼球自体がやられているわけではありませんでした、昼頃になると、その腫れ上がった瞼のために、目が開かなくなりました。そして、膿が出るのであります。その膿を昼頃になると、私が拭き取ってやりますと、微かに目が開くんです。そして、足も立つもんですから、水を捜しに行ってくれなわけです。私の腰に下げておりました手拭いで、水を浸すことを教えまして、そしてその膿と血で汚れた手拭いの水を二人で吸いながら、生きていたわけでありす。その子が昼頃になりますと、「おにいちゃん、目を開けて。」って言うんです。この言葉を今なお私は忘れることが出来ません。私が眠っていて、私に「目を醒ませ、醒ませ。」というわけではありせん。自分自身の目を開けることを「お兄ちゃん、してくれ。」っていうわけでありす。『大仏開眼』という言葉があ

ります。仏様に目を入れる。こういうことはあります。しかし、人間が、人間のこの目をつけなければならぬというようなことだけは、忘れることができないのです。「原爆というのは、恐ろしいもんだ。」っていうことは、誰よりも私が知っております。そして、その幼児が苦しい中から「おにいちゃん、目を開けて。」「あたいの目をあけて」というその言い方を知っているということ自体も、私にとつては、大変な驚きであつたわけですから、一つのように開けた目でもって、私のために、小さな小さなカボチャであります。そのカボチャの中を刳り抜いて、その中に水をためて、私のために水を運んでくれたことなんです。私は、思わず、その子の指を手にとつてみました。こんな硬いカボチャをどうしてくりぬいたのであらうと。ところがその子は大変利口な子であつたように思ひます。

嫌な話は、ここから先なんです。「このカボチャはおにいちゃんときみと二人の大事な宝だね。」と言って、枕元に置いて寝るようになりました。ところが、どうでしょう。そのカボチャを盗んでいく大馬鹿者がいるんです。身動きができない人間達が、足の踏み場もないくらい転がっているわけでありす。盗んだ者はその連中の中にいたんです。他から侵入してきた者ではないんです。それ

が便利な物だと思つてたんでしようか。そのカボチャを盗んでいった奴がいるんです。この世で憎むのは原爆ではありません。本当に憎まなければならぬのは人間なのです。恐ろしいのは原爆ではありません。人間なのです。一つ違えば鬼になつてしまふ、悪魔になつてしまふのが人間であります。私は今日皆さん方に、まず人間の心とは天が与えたものであつて、己の自由にすべきものではないんだということを、もう一度分かつていただきたいと思ひます。それを思い返していただきた。そして、子ども達の指導に当たられる時には、まず、子ども達自身に「おまえの心はおまえの心にして、おまえの心ではないんだよ。」ということを必ず言つてやつてほしいと思うわけでありす。

## 6.

難しい言葉を此処に掲げました。これは、昔の中学程度の教養をもつておりましたら、私達の年代から上の者達は、必ず知つていた言葉であります。『中庸』の冒頭の言葉であります。「天の命する、これを『性』といひ、『性』を卒する、これを『道』といひ、道を修むる、これを『教え』という。」どうでしょう。日本での儒教は、朱子学とか陽明学とかいうふうに分かれていきまして、読

み方が、「いや、俺の習った中学では、そんな読み方しなかった。」という方もおありかも知れませんが、私は、私の教わった通り、今、皆さんに申し上げたわけであります。本日の会合で、皆さん方は、青少年の問題に苦慮されておいでの方々であります。青少年を正しく導かなければと、熱心にお集まりの方々だと思ふわけであります。今、『中庸』の冒頭の言葉を引用しましたのは、我々教育に関心をもつ者達が、今日「公私にわたって欠落している面というのは何か。」というようなことを指摘したいと思うために引用したわけであります。

親が子に向かって親たるべきことをしようとするならば、親が子を教育するとはどういうことなのかということを考えなければならぬわけであります。

今日も東武線の中で、私の横にいたお母さんが子どもをあやす言葉とか、それぞれを聞いて参りましたけれども、お母さん達は一生懸命、子どもを教育しようとしています。しかし、あれは「教育とは何か」ということを考えない教育であります。恐ろしい教育をしています。それは、自分が、我が手でやるべきとしているからであります。「教育は神様でなければできない仕事」なんであります。何故か。「天が人の子に人の魂を与えた」からであります。人の子として育成を

図るということであるならば、「神の思し召し」というか天の意向というものを伺わなければならない仕事ではありませんか。ところが、今、一般で行われている「我が子に教育をつけなければ、父ちゃんみたいになって大変だから。」と言っている教育は一体何でありますか。教育が偏重しているのであります。知的教育だけをもって、教育っていうふうに考えているわけであります。昔から言われていきますように、教育は「知情意」その三つの面に涉って行わなければならないとしているのが、洋の東西を問わず、人間が考えてきたことであります。ところが今、一般に母親がやっている教育は、一番上の知だけであります。つまり、学校の先生がやっている真似事をやっているわけであります。知の面なんというものは、学校の先生に任しておけばいいじゃないですか。そして今一番欠落している面をやつたらいいではありませんか。それが何かというと、「情」と「意」であります。「情」も「意」も、日本語読みをすると、「ころ」であります。「人情」というのも「ころ」ではありませんか。「情愛」というのも「ころ」ではありませんか。「意志」というのも、「ころ」ではありませんか。しかし、この「情」と「意」の教育は、最も難しいわけであります。つまり、今日の皆さんの課題であります「青少年の問題」も、知

の面は問題ないわけであります。やりすぎているくらいにやっているわけであります。しかし、そのためにおかしくなっているわけですから、やったのは「道徳教育」をやっただけであります。しかし、この「情」と「意」の教育は、果たしてやったきたでありますか。これを考えるためには、先程そこに出しました「天の命ずる。これを『性』と謂う」の『中庸』の言葉を考えなければならぬのであります。「天」が地球上に人の子を生みなします。人の子に与えるもの、それが「性」であります。「性」は、「天性」の「性」であります。みんなが言うではありませんか。「これはこの子の天性である。」と。あるいは、「個性」というではありませんか。それを誰が与えたんですか。「天が与えた」という中国人の考え方は、正しいではありませんか。「これは私のもう気性ですもの。」っていう「気性」は、その「性」ではありませんか。あるいは、「あいつは、なかなか根性があるよ。」という「根性」は、天が与えた「性」ではありませんか。その天が与えたものに随っていく。次に、『性』に随う。之を『道』と謂う。これは、天が与えたものをねじ曲げるのではなくて、それに従っていく。それが「道」だという教えです。さらに、「その『道』を修めていく」のが、「教育」だというわけであります。戦後、日本人は奢っ

てしまったんであります。若者が気ままになりすぎたんであります。元々日本人は、「氣」について敏感であります。先程言いましたように、挨拶で「あなたの氣は、如何ですか?」「天から与えられたご機嫌は、如何ですか?」と訊いてきた国民ですから。ところが、「これが教育だ。」ということを失った時に、日本人が持っている「氣」は、どこにいくんでありますうか。気ままに、放埒に動き回って、無理もないことであります。我々はどう一度「天がその氣を与えているんだ。」というところへ帰って行くのではありませんか。今の教育は、親があるいは学校の先生が、「わかる?わかる?」と、この教育ばかりしているわけであります。「わかった?」「わかったら宜しい。」「分かんない!まだ分かんないのか。」こればかりやってるわけです。即ち「知の教育」ばかりを行っているわけであります。

ところが、「情」とか「意」とかになると、「わかつちやいるけど、やめられない」とかいう問題なんであります。子ども達も、おそらく非行に走っている子ども達も、「わかつていたんだ、そんなことは。だけでも、俺は突っ走ってしまったんだ。」というのが彼等達だと、私は思うわけであります。今、流行っているような「ぶりっ子」だとか「ツツパリ」だとかいうのは、気ままになった者達

が、当然姿を現している結果であります。気ままな姿を現さない子ども達は、むしろどこかで、それを遠慮しているだけではありませんか。鬱屈し歪められているだけではありませんか。「情」とか「意」の問題に真剣に向き合わない、いつも事後処理だとか、それについて現象的な処理をすることだけに終わってしまうだろうというふうにいるわけがあります。

## 7.

今申し上げたような問題を「江戸時代以後、誰か、こういう話を書いた者がいないだろうか」と思って調べてみました。世間では、この人はあまり評判になっていませんけれども、幕末に近い天保頃の人、大原幽学という学者であります。この人が、実に克明に書いてくれているんです。江戸時代の幕末に、こんな凄い人がいたか!って、私は思いました。極めて、具体的に書いているんです。

「大馬鹿者は、之を守るに利口を以てす。」(おまえは「大馬鹿者だな。」と言われると、「いえ、私は利口です」と言いたくなる。)こういうことですね。「世の中の嘲りに遭うと、之を保つに手柄顔を以てす。」(世の中の人達の嘲りに遭うと、「私は、こんな立派な

ことをしているんです。」と手柄顔をする。)  
「柔弱未練、之を陥るに、握り拳を以てす。」(「おまえは何という未練者か。」あるいは「何という臆病者か。」と言われると、その人間は必ず握り拳を振り上げる。)(「身上を滅ぼす。之を致すに氣高きを以てす。」「やつぱりお前は身上を滅ぼしたじゃないか。」)って言われると、「私は氣高いからな。」と言う。」「武士は食わねど高楊枝だから。」なんて言うのと似ているわけです。「虚榮を以てする」ということであります。

私は、これを見た時に、「偉い学者もいたもんだ。」と思いました。つまり、これが世の一般的な人情であります。こういうふうには、人間の心は動いていくのが当たり前なんです。今の若者達や子ども達が、何故あれ程粹を外していくのか。それは、そうなるようにそうなるように、我々が仕向けているということなんであります。気まま放埒、したい放題にしているんですから。お母さんは「あなたが勉強が出来るようになったら、何でも買ってあげる。」って毎日やっているんですから。学校から帰って来て家の手伝いしようものなら、そんなことはお母さんがやってあげる。早くお二階に上がって勉強しなさい、なんてやっているんです。「いい大学に上がって。」こういうことばかりやっていて、何にも肝心の教育をしていないんです。「馬



鹿たれ。」って言われると、カンカンになって怒る。「ね、お前。誰かから悪く言われているよ。」なんて言ったら、それに対してまた反発する。非常に感情的です、そうやってしまったのは、「感情教育」をやっていない、世の中自体が大人がやっていないんです。私はもう黙っていない。私達はしつかり、私達が先祖から教えてもらったものを、今からでも、今からじゃ遅いかもしれないけれども、やっぱり言ってみよう。先祖から伝えられたものをその通り言ってみようと思ひ直しているわけでありませう。

ではどうすれば良いのか。大原幽学はこう、「まず、人間に謙虚さを教えなさい。」と言っています。まず謙虚であれということをお教えなさい。人間は一人では生きていけません。またお前の心はお前の心でないんだ。神様が与えている心なんだ、という謙虚さを持つてということでありませう。また大變科学的でありまして、女の子は十三になると、子どもを孕める頃になっている。だから経水を見る時がきている。つまり生理がくるようになっていて。経水を見る頃になると、どうしても見栄を張りたくなる。人様の姿・形・そういうものに目が奪われるようになっていて。そういうふうなことを教えてくれているのです。すぐ恥ずかしがる、というふうな状態になっている。そこを乗り越えているんです。

ね、また、このことは、気が弱くなっているんだ、とも言っています。十三ぐらいになると、その一番本体としては、気が弱くなっている。だから見栄を張りたくなる。男子のほうでは、十五才になると、これは勿論満年齢ではありません。数えです。ですから、丁度今皆さん方が問題になさっていらっしゃるその子ども達の年代であります。大原幽学はこう書いています。「男子は十五才となりて、子を生ずる頃にして、一滴の水を發するを通例とす。」極めて露骨です。でも非常に的確です。子どもがもう生める身体になっている。一滴の水を發生することができるんだ。これは、男子は陽のものであるからだと言っています。この「陽」っていうのは、先程の「氣」なんです。「陽氣」「陰氣」の「陽」なんです。陽氣がそこまで成熟してくるんだ、っていうわけです。それに反して女性は陰氣なんです。「陰」の気が働く。片一方は「陽」の気が働く。ですから、この「十三才」頃、男子は「十五才」になると、極めて気が強くなるんだ、っていうことを言っております。

次に、大原幽学先生は恐ろしいことを言っているんですが、これは現代人としては、ちよつと抵抗があるところでありませうけれども、「武士の家庭においては、子どもを教育するに規則をもっている。ところが、一

般庶民は、それを持っていない。だから、子どもは上手に育たない。」っていうふうに言っているわけです。私は、大原幽学が言っている「庶民」が、「現代人」に該当するのではないかと思います。現代人は、「偉くなるまい。庶民の中に集団で生活しよう。」そればかりですから。

つまり、子を育てる規則を我々は見失ったのではない。大原幽学先生が言った通りを言いますと、そういうことになるわけでありませう。「武士の子は育つのに規則あり。」庶民はこれに反して、「子を育つる規則もなし。そのくせ天から与えられた気はあるんですから、その氣に溺れていく」っていうふうに書いております。見事なものです。武士はちゃんと規則を持っている。だからこそ武士は立派だったんだ。庶民もそれに倣わなくちゃいけないっていうことを言っております。

それから、この点がもう全く違うなあと、思う点があります。それは、「耳目」を謹みなさい、「耳」と「目」を謹みなさいと言っております。それから、山鹿素行は、「容貌を謹みなさい。」「容貌」「すがた」「かたち」です。ね、それを慎みなさい、と言っています。これは、ちよつと短絡的に受け止めてしまわれると困ります。「きちんと行儀良くしなさい。」って言ったら、これまた道德教育になってしまう。これは、目なり耳なりは、

あるいはこの表情ですね、顔立ちとか姿勢とかは、心が外と交渉を持つその窓口なんだ、っていう考え方です。心が外へ出て行こうとする。それは目を通して出ていく。あるいは外のものが心へ入ってくる。その時には、耳なり目なりを通して入ってくる。だから、この入り口のところを気をつけなさい、っていうことを言っている。よろしいですか。どうか我々はその断片を「諺」なり、いろいろな言い方でもって知ってはいるんです。「目は心の窓だよ。」なんて言ったりもしますけれども、ところがもう一つ大事なものは、実は、「内と外との」「内と外とを引き結ぶ」「内と外とを関係させる。」そのきつかけは、「耳」にあり、「目」にあり、「口」にあり、この「からだつき全体」にあるんですよ、ということを儒学者たちは言っているのです。

ところが、学校の先生もたくさんいらっしゃるので、ちょっと言いづらいんですけども、戦後の一般的な教育は、「自然科学」に偏したんです。ですから、「お前の目でもって、この自然現象を丁寧に観察しなさい。」そればかりやってきたんです。「事実を事実として見なさい。」そればかり訓練したんです。しかし、事実を事実の如くに聞いて聞いたり見たり、事実を事実の通り伝えるっていうことは、人間はできにくいんです。何故か。「気」が入っているからなんです。

す。人間の目は顕微鏡にはならないんです。人間の耳は聴診器にはならないんです。むしろ、気の発達してきているこの年代の者達においては、この世ならぬものを見たり聞いたりでできてしまうわけです。心にもないことが言ってしまうわけです。だからこそ、「耳なり、目なりを慎みなさい。」「姿形を慎みなさい」っていうふうに言っているんです。人間はどこまでも見たものを見た通りには見られない。見えないものすら見るのがまた、できるんですよ、それは「気」をもっているからです。「魂」をもっているからであります。「霊」や「魂」というのは、「霊」が活動し出したら、それを日本人は「魂」という。同じように、「こころ」が動く「情」になり「意」になるわけであります。我々が問題にしようとしている「こころ」は、実は「情意」であります。これを問題にしてやらなくちゃいけないということが、さっきから言いたいところでございます。ところがそれは、「目」を通して、「耳」を通して、「口」を通して、あるいは「姿」を通して出てきてもするし、受けとめられもしているんだ、っていうことであります。宜しいでしょうか。

## 8.

そこで私は、それらをひっくるめて「構

え」の教育をやるべきであるということを、もう随分前から言ってきたわけであります。青少年達に「構え」の教育をしてやらなくちゃいけない。「心構え」「身構え」「気構え」これを問題にしてやるべきなんだと。人生の経験を積んでいるお父さん達、お母さん達、あるいは学校の先生達は、子ども達に向かって「その時の身構えはまだ未熟なんだ。その時の心構えはまだいけないんだ。」ということの指導をしなければいけないかったんではないか、と思うんです。私の大学の亡くなりました小原國芳先生は、学生をつかまえて、よくこういうことを言われました。「お前は、怒られたら怒られた時のような顔をしなさい。」「何だ、その顔は。怒られたら、怒られたような顔をするのが、勉強なんだ。」と、はつきり言われました。生意気な学生達には「冗談じゃない。俺の心はそんな心じゃないのに、そんな怒られたような形ができるか。」なんて言って、私のところへ文句を言いにくる学生もいました。昔の人達は、形のほうから入れようとしたわけであります。面白いとお思いになりませんか。これは仏教のほうで特に言ってきたことであります。人間は身（からだ）と口（くち）と意（こころ）という三つの業をもっている。この三つをととのえることが仏様の教えなんだ、というふう

に言っているのであります。こんなことは、

つい江戸時代の人達は、みんな常識で知っていました。「体だけできても、意が伴わなかったら駄目。」「口先だけで上手なことを言っていたって、心がそれと違っていたら駄目。」「これは、一般常識で考えてみても、そういうことを我々は言っているじゃありませんか。ところが、この身（からだ）と口（くち）と意（こころ）とを調えるということは並大抵のことではありません。」

一つ、馬鹿な話をさせていただきます。私が肺ガンになりました時に、病院長は私に「ガンだ。」ということをし、先に言ってくれたわけがあります。私は原爆の影響があったから、ちっとも狼狽えませんでした。「そうですか。宜しく頼みます。但し手術は痛いですか？」っていうことを尋ねました。「痛くないとは言えません。肋骨を三本ばかり削らせていただきます。」「どうして肋骨を三本も削らなくちゃいけないのですか。」「肺は肋骨の中にあります。」って言われて、「あつ、そうか。」と思ひまして、肋骨に窓を開けなければ肺は取り出せません。「肋骨の隙間から、すうつと引つ張り出して切るわけにはいきませんか。」って言ったら、「そりゃあ、できません。」それで、手術をしてもらったんですが、私は一つだけ苦慮したことがあります。それは「親に知らせたものだろうか、知らせないものだろうか。」ということ

です。原爆の経験がありましても、親をもっている子どもの立場として、「親にこれは知らすべきだろうか、知らせないほうがいいだろうか。」ということで迷いました。自分で決しかねて、私は弟を呼びました。弟は言下に、「言うな。」って言いました。「隠せ。」って言い、また私はそのようにしたのでありますが、手術の当日の朝になりますと、「これは、間違いである。」というふうに思いました。親に知らせないで、自分が肺ガンの手術をする。まさかの時には、それで逝ってしまった。親に知らせないで、「これは、間違った。」と思いました。特に、自分は原爆の時に身体障害者にもならず、五体満足の元の形にしてくれたのは親だったんではないだろうか。ところが、自分一人で一人歩きできるようにしたら、自分の体にメスを入れ、そして肺ガン切除が成功したとしても、そういうことを黙ってするっていうことは許されることではないというふうに私は思いつきました。弟と約束はしたけれども、「やっぱりこれは知らさなくちゃならない。」と思つて、手術室に入る間際になって、私は手紙を書きました。そして、その実、「我ながら天晴れである。」とにやりとしておりました。速達で出したところで、この手紙が着く時は、手術が完了しているし。そうした時には、安否の程がもうすぐに郷里に知らされるであろ

う。弟には「知らせない。」って言った約束も、これで果たせる。上手いこと俺は考えたもんだ。流石だな。なんていうことを考えておったわけです。そして、手術室に入りました。そして、手術室での出来事なんでありましたが、私が手術して麻酔が醒めた時に、まず気になったのは、「手術中に私は何を喋っただろうか」であります。全身麻酔ですけれども、人間は喋るんです。酷い人になると、手術台から飛び降りるそうです。逃げ出す人もいます。これは面白いことですね。そのことは私は何故知っていたかというと、私の父がやっぱりガンだったわけです。そして、ガンの手術をした時に長くかかりまして九時間の手術だったんです。手術してくれた医者が、私の友人であつたので、手術中に「のぼるちゃん。」って言うんです。医者に向かつて、「おい、のぼるちゃん、もう明日のことにしようよ。」って言ったんです。大変肝っ玉の座つた男のように聞こえますね。「もう、明日のことにしようよ。」って手術中に言った。私もびつくりしました。「凄いなあ。やっぱ、俺の父親は凄いなあ。」と敬服しました。でも、私をもっと驚いたことは、手術中に「ものを言う」ということであります。無意識でものを言うということはありません。私は、無意識というのは、意識がなくなつたんではなくて、無意識という名の

意識だ、というふう思ったわけでありま  
す。事実、私も喋ったのであります。私は看護婦さんと呼んで訊きましたが、でも、これは絶対に教えてくれませんでした。交換手と同じで、秘密は守らなくてはならないんだそうです。そこで私は、「あなた達では駄目だ。婦長さんと呼んで、『私は、専門がこういう専門であるから、学術的に知りたい。』というふうに言ったんですけれども、駄目でした。」「じゃあ、お医者さんに言います。」「お医者さんに言っても、そりゃあ駄目ですよ。」と、婦長さんに宥められました。」「何としても、知りたいんですよ。」というようなことを言って、「イエスカノーで答えてくれませんか。」と、私は苦し紛れに言ったんです。ね。そしたら、「そこまで仰るんでしたら、イエスカノーで答えましょう。」と言われました。「しめた。」と思って、途端に私は「痛」って言ったのでしょうか。」こう言ったんです。つまり、何を訊いたと咄嗟に思いました。そしたらその婦長さんは、「仰いませんでした。」それを聞いて、凄く嬉しかったです。無邪気なものです、やっぱり、「痛いとは言わなかった。」と聞いて大変うれしかったです。原爆の時にも私は「痛い」とは一言も言わなかったのです。言うまいと心に誓ったんです。だから、今度、肺ガンの時に言ったか？言わないか？どつか頭にあったんじゃない

いんじゃないか。だから、それを訊いたんだと思います。ところが、また人間というのは面白いですね。そういうところ、つるつるとつられていくんですね。イエス・ノーとだけしか答えられないと言っている婦長さんが「痛いとは仰いませんでしたねえ。」と感心し始めたんです。そうすると、もう無意識の状態、ものがつらつらと喋られているわけです。「でも、先生、痛み止めの注射は打てと何度も仰いましたよ。」って言われてしまいました。私は、それを聞いて、がっかりしました。けれども、「あ、上原輝男、ここにあり。」というふうに思いました。知能犯ですね。「痛い。って、絶対言ってやるもんか！」って、どこかで思っている。だけれども、「痛い。」んですよ。全身麻酔して、そりゃあ、痛みなんて、全然感じられないはずなんですけれども、痛いんですよ。背中には三十センチ以上の傷がある。麻酔をかけて切っているんですね。ですから患者が知るわけありません。でも、それにもかかわらず、私は背中から切られたというのを知っております。これは、何でしょうか。何故かと言いますと、自分の病室に帰ってきましてから、私は仰向けされておりました。麻酔が覚めたと同時に、物凄く痛さなんです。そして私は、もう怒鳴っておりました。映画でするように、麻酔がばあーっと覚めていったらね、

霧がばあーっと晴れていった、そして、我に返った。そんなの大嘘ですから。（笑）自分の声で、私は「あれっ。」と思っていました。もう私は、大声で怒鳴っていました。「この馬鹿野郎！」って言って、怒鳴っているんですよ。「背中を切っておきながら、それをベッドにくっつけて、仰向けに寝させておる馬鹿がいるかあ。俯せにしろ。」って言って、怒鳴っているんですから。私が、何で知っているんではないかね。背中から切ったことを。これが、人間なのであります。

身（からだ）と口（くち）と意（こころ）を一つにするということは容易なことではありません。子どもが、どんな下心を持っているか見抜くのは、大変なことであります。しかし、我々に出ることは、「お前の下心を上手に外に出していかなければいけない。」ということ。日本人は欧米人と違って、「内と外」という考え方がありません。私は、「ものを考える基準」は、「内と外」だと思っています。先程の挨拶にしましても、そうです。「こんにちは、お元気ですか。」これは家のもんには言わないでしょ。家族の者に、「お父さん今日は。お元気ですか。」なんて言いますか。言わないんですよ。「今日は、お元気ですか？」っていうのは、内（家）から外の人に向かっていう言葉だということ。を、我々はちゃんとどこかで知っているじゃ

ありませんか。我々が本当に行わなければならない教育は、青少年を非行から守ろうとするには、意識あるところだけの教育だけではどうしても出来ない、ということをし、私は最後に言っておきたいと思うわけでありました。我々がやってやりたいのは、子ども達の無意識の中に入っていくとしなければならぬんだということでありました。

## 9.

最後になりましたが、「心に震えを」という演題をつけましたのは、大日本茶道学会の家元さんである田中仙翁さんが私にこんな話をしてくれたからです。お茶席でも「四畳半のお茶」それから「三畳のお茶」というのがあります。そこで私に言われたんです。「『一畳半の茶』をやつてごらんさい。心に震えがきますよ。」とおっしゃった。私は、素晴らしいことを、日本のお茶つてやつていたんだなあと思いました。「あつ、お茶の面白さつて、それだったんだ。」と思いました。形を真似ることだけが面白いんじゃないんです。何故一畳半の茶なんというふうなものですか。何故一畳半の茶なんというふうなものがあるのか。それは人間には適当な距離があるわけです。話をするのに、適当な距離。「間合い」ですね。その「間合い」を思い切つて接近してみる。そして相對座してみ

ると心に震えがきますよ、つて言われたわけでありました。我々は、まだまだ無意識のまんま全てを行おうとしているわけです。人間が神様から受けていることは、一体、何であつたのか。そして、神様から得てきたことは何であつたのか。例えば、私は「原爆」でも死ななかつた。「肺ガン」でも死ななかつた。これは、私が寿命があつたからだ、私が強かつたからだ。そんなこと、一度も思つたことがありません。私は天に生かされているまです。で、私がつていうふうには思つていません。そして、私が努めなければならぬのは、私を生かして天は何をさせようとしているんだろつかということに、日夜その問題を解こうということ一杯であります。これは、私が特殊な状況に置かれたから、たまたま私には分かつたやつただけでありまして、子ども達にしましても、それぞれの人間にとつて、神様が、天は、私に何を与えているのか、私に何をさせようとしているのか、つていうことを、謙虚に思うところから、また自分の魂を如何に活用するかというところから始めなければならなかつたのではないかというふうな思ふわけがあります。ちよつと時間を超過致しましたが、拙い話でありました。よく御理解いただけなかつたところもあるかと思ひますけれども、長い時間、御静聴いただきましてありがとうございます。

昭和57年8月3日  
於…鬼怒川温泉・鬼怒川御苑  
栃木県塩谷地区PTAスクール記念講演

平成五年一月二十九日  
上原輝男先生最終講義

「かいまみの世界」

